

NON NOVEL



長編企業推理小説
書下ろし

清水一行 男の報酬



NON NOVEL

「ノン・ノベル」創刊にあたって

「ノン・ブック」が生まれてから二年一ヵ月、ここに姉妹シリーズ「ノン・ノベル」を世に問います。

「ノン・ブック」は既成の価値に「否定」を発し、人間の明日をささえる新しい喜びを模索するノンフィクションのシリーズです。

「ノン・ノベル」もまた、小説を通して、新しい価値を探っていききたい。小説の「おもしろさ」とは、世の動きにつれてつねに変化し、新しく発見されてゆくものだと思います。

わが「ノン・ノベル」は、この新しい「おもしろさ」発見の営みに全力を傾けます。ぜひ、あなたのご感想、ご批判をお寄せください。

昭和四十八年一月十五日

NON・NOVEL編集部

NON・NOVEL-112

長編企業推理小説 男の報酬

¥690

昭和55年3月1日 初版第1刷発行

著者 清水 一行

発行者 伊賀弘三良

発行所 祥伝社

〒101 東京都千代田区神田神保町 3-6-5
九段尚学ビル
☎ 03 (265) 2081

発売 小学館

印刷 堀内印刷 製本 関川製本

長編企業推理小説

清水一行 男の報酬



NON NOVEL

祥伝社

目次

一章		4
二章		43
三章		88
四章		134
五章		185
六章		228
解説・権田萬治 ごんだ まんじ		267

カバー構成・CEへ小松原京子へ
 カバーイラスト・山下一徳
 本文イラスト・山野辺進

一章

1

回転ドアに体をはさみこむようにして、深見夏紀がホテルへ入っていった。

夏紀は一階ロビーの左手、一段下がったランデブーラウンジをよく見通せる位置でベンチシートにすわり、ポケットサイズのカメラを、適当にいじっていることになつていた。

六月上旬――

黒南風と呼ばれる、南の海の熱気を運び、じわじわとむし暑さをつくりだす不快な風のせい、夏紀より五分遅れてホテルへ入るため、道路をはさんだ日生劇場前に立っていた入江達也は、杔足にからみつくなつとりとし

た汗に、思わず顔をしかめた。

時計を覗き一人でうなずいてから、信号が変わるのを待って横断歩道を渡り、タクシীর列をすり抜けて、入江はホテルのドアに手をかけた。

エアコンの爽やかな風が肌を拭く。

ロビーに踏みこみ、一度立ち止まってから、入江は目立たない紺のワンピース姿の夏紀の位置を確かめ、そこからはつきりと向かいあう相手の顔が見通せる席へ、ランデブーラウンジの階段を下りた。

黒皮張りの豪華なソファは、幅がたっぷりしていて余裕があつた。

田口……はまだ来ていない。

一息いれて、オーダーを取りにきた和服のウェイトレスに、ジュースを注文すると、気持ち落ち着かせるためマイルドセブンに愛用のダンヒルで火をつけた。深く吸いこんだ煙を思いきり吐き出し、夏紀の存在を田口に気取られぬよう、腰の位置を変えて横向きに体を入れ替えたときである。

「入江さんいらっしゃいますか」

黒服に蝶タイの男が、広いラウンジ内を見回して呼んだ。

入江が手を上げる。

「入江さんですか」

腰をかがめて黒服の男が聞き返した。

「そうです」

「田口さんからの伝言です。いま室を出るので、二、三分待つてくださいとのことですよ」

「わかりました」

うなずいて、踵を返した男の後ろ姿を見送る。ラウンジの客は数えるほどで、入江は夏紀の緊張した視線を感じたが、無視して足を組み直した。

田口と名乗る男から、入江に電話がかかってきたのは午前十時で、その電話の処置を総務部長の関口英一に相談し、関口はさらに斎藤雄三副社長と打合わせをし、電話を受けた入江が二十万円の現金を持って、指定された十一時半に、帝国ホテルのラウンジで田口と会うことになったものである。

ロイヤル物産法規部の入江達也は、三日前にタンザニ

アのダルエスサラームから、帰ってきたばかりであった。

一面識もない田口という男からの電話は、入江のダルエスサラーム行きと関連のある問題について、極秘の情報を提供しようというものだった。田口はその代償として二十万円を要求していたから、極秘の情報といっても、スキャンダル絡みの内容であることはいうまでもない。

しかし夏紀を連れてきたのは、入江の独断だった。

入江としては、総務部長の指示で動いているとはいっても、内容のはっきりしていない情報にたいして、二十万円ものキャッシュを初対面の男に支払うわけだし、後日のトラブルに備え、受渡し現場の写真を、ひそかに撮っておこうと考えたのだった。

「絶対に無理はしないでくれ」

入江は夏紀に念を押しておいた。

もし、受渡し現場の写真撮影を相手に気づかれてもしたら、後日の証拠もなにもあったものではない。

「うまくやるわ」

夏紀は外国部の同僚OLから、ポケットサイズのカメラを借りてきて、高感度フィルムを装填していた。

運ばれてきたジュースに口をつけたとき、二人の男が入江の席に近づいてきた。一人は黒服のボーイで、その背後の男は三十五、六歳の、派手なプリントネクタイに、茶色のスーツを着て、メタルフレームの眼鏡をかけていた。

手にはアタッシェケースが握られている。

「こちらさまです」

黒服のボーイの言葉にうなずき、「入江さん？」と覗きこむように確かめてから、向かいあった席ではなく、入江と並んだソファに瘦せた長身を折るように腰を下ろした。

「田口さんですね」

「そう……」

横柄にうなずき、田口はアタッシェケースを膝の上で抱えた。

「名刺の交換をしますか」

入江は骨張った田口の横顔に言った。

一七八センチで、社内でも大柄な部類に入る入江ほどではなかったが、それでも田口は長身で、入江に冷やかな一瞥を投げた。

「その必要はないね」

「そうですか。では、さっそく用件に入らせてください」

「ゲルは……」

「持ってきました。ただどういってお話なのかわかりませんので、一応お聞きしてからでないとお払いできません」

入江は緊張しているはずだったが、そのわりには、應對する口調に澁みがないなど、自分で思った。脅迫者ともとれる情報屋と、こんな取引きで会うのははじめてだったし、こういうことは、会社の法規部の通常の仕事とは無関係であった。

——夏紀は、

ベンチシートを移動したかなと、入江はふっと心配になった。田口が入江と並んだソファにすわってしまったため、はじめの位置では撮りづらいはずだった。

三星商事、三川物産という、年商八兆円から九兆円の旧財閥系を筆頭とする大手四社について、このところ取扱い高も急増している総合商社の一つ、ロイヤル物産の法規部は、どこの総合商社でも同じだったが、本来の仕事は契約関係書類のチェックや、それに関連したトラブルの法的な処理をすることにあつた。

総合商社の営業活動は、共産圏を含めた世界百数十カ国を対象に、連日休みなく展開されていたから、契約関係書類といつても、それは膨大な量にのぼり、しかも取引内容に応じて多様であつた。

それだけに専門のセクションが必要になってくるわけである。

その事件——は、四月中旬にタンザニアのダルエスサラームのホテルで起こつた。といつても契約関係書類のトラブルではなく、ロイヤル物産常務で、建設事業本部担当の紅林禄助が、そのダルエスサラームのホテル・キリマンジャロの室内で、何者かにピストルで射殺されたのである。ところが一カ月以上経つた五月の中旬、入江はその紅林常務の死因調査で、アフリカ出張を命じられ

たのだった。

殺人事件の死因調査は、法規部の管轄ではなかったが、しからばといつて総務部の管轄と決まっているわけでもない。関口から相談を受けた斎藤副社長が、たまたま入江の、ロイヤル物産入社の保証人で、遠縁だったといふことから、社内的にもあまりオーブンにできない問題の調査をさせるのに、気心が知れていいだろうといふ、思いつきから指名したものだつた。

法規部へ移つて二年、その前は機械事業本部に所属し、プラント輸出の商談で、入江は中近東やヨーロッパには、頻繁に出張していたし、大きなプロジェクトを担当して、十五カ月ほどオーストラリアの荒野で暮らしたこともあつた。

それだけに、二年間の法規部でのデスクワークに、うんざりしかけていたことは確かである。

ただ、紅林常務の死因調査といつても、ダルエスサラームの警察は、ホテルの室内へ侵入した現地人の物盗りによる犯行……という結論を出していて、物盗りによる犯行である以上、現行犯で逮捕しない限り犯人を追及す

ることは困難だと、捜査らしい捜査もせずに事件を処理してしまつた。

ロイヤル物産の、ダルエスサラーム出張所員三人も、紅林常務殺害現場のホテルの室内を見分していたが、室内はあまり荒らされていなかったものの、所持品の中から、カメラが一台紛失していて、そういう情況から見ても、警察の結論はおおむね當を得ているという判断を、本社に伝えてきていた。

海外の、それもアフリカで起こつた事件であつた。

遺骨も日本に帰っていたし、四月末には華社葬による告別式が終わつていて、ダルエスサラームの警察が、現行犯として逮捕しない限り、物盗りから派生した殺人事件の犯人捜査は困難だと言つていたから、本来なら、ロイヤル物産本社が海外で殉職した常務取締役の死因調査に、わざわざ人を派遣するといふことはなかつた。

ところが、紅林則子未亡人が、ほんとうに現地人による物盗りの犯行かどうか、背後になにか隠された事情があるように思えてならないと、斎藤副社長に強く申入れをし、その未亡人の意向を受けて、入江がタンザニアへ

派遣されたものである。

入江は、刑事事件関係の調査ははじめてだったが、紅林がアフリカへ入つてからの足跡を丹念に辿つた結果、現地で新たな問題が浮かび上がってきた。

それは業務で出張した紅林常務に、女性の同伴者がいたということである。

Mrs NOBUKO NIMI

カイロからナイロビまでの、途中でキンシャサへ迂回した紅林が泊まつたと、同じホテルの宿泊台帳にあつた同伴女性の名前で、もちろんずっと同室だつた。

NOBUKO NIMIを漢字に直すと、伸子または信子。

ニイミは新美、新実、新見となる。

電話帳などで一番多いのが新美伸子――

ところがその同伴女性は、ナイロビまで紅林と一緒に行動しているが、紅林がダルエスサラームのホテルで殺害される直前、なぜか姿を消しており、ダルエスサラームへ入つたという形跡がなかつた。

さらに入江は、そのダルエスサラームで、紅林がサファリラリーのゴール地点に立っている、一枚のスナップ

写真を手に入れることができた。その写真は、ラリーに優勝した車こそ写っていないが、それでもゴール台を背景にしてたくさんの人の群れの中に、紅林と並んで、入江がどこかで会ったことのある女性が写っていた。見覚えのある顔だったが、それが紅林の同伴相手の新美伸子……なのかどうか。もっともその写真の入手には、偶然とは思えないミステリーじみたいきさつがあって、入江自身、写真の入手に生命の危険を感じたくらいだった。

もともと門外漢の調査だったから、たいした収穫があったわけではなく、それでも一応帰国して、調査結果を関口総務部長に報告、新美伸子がいったい何者で、スナップ写真の女性が誰なのか、紅林の事件にどういう関係があるのかといったことや、またこの調査結果を、果たして紅林未亡人に知らせるべきかどうか……。入江の報告を基に、関口が斎藤副社長とその処置を検討しているとき、田口と名乗る情報屋の、売込み電話が飛びこんできたのである。

恐喝とも受け取られかねない、二十万円もの金を要求、

会社もそれだけの金を払うことにしたのだから、放置できない情報であることは確かだった。

紅林が同伴した女性は、紅林が担当する建設事業本部の元第一部長、大久保晴宏の妻澄江であり、紅林の出国の二日後に、澄江が日本を発ってアフリカで落ち合った証拠がある……と、田口は電話で言った。

「大久保部長の奥さん？……」

「間違いないね」

「まさか」

「大久保氏はいま、奥さんと別居しているからね」

「ぼくは大久保さんをよく知っているんですよ」

「じゃ別居していることも知っているはずだ」

電話の情報で、入江がダルエスサラームで手に入れてきた写真を改めて確認したところ、サファリラリーのゴール地点で紅林と並んで写っている女性は、言われてみて、大久保澄江そっくりであることがわかった。

どこかで見覚えのある女性と、入江が感じたのもそのためである。

「別居していたということは、まったく知りませんでし

た」

「うん……」

「ほんとうに大久保さんの奥さんなんですか」

しかしなお、入江は半信半疑だった。

「そうだとすると、まずいことになる」

入社年次で、大久保より四年後輩の関口は、そこで腕を組んでしまった。

「どういうことなんですか」

「わからんな」

「大久保さんに直接聞くわけにはいきませんか」

「あまり無神経なことをしないでくれ」

関口の当惑はもっともだった。紅林は建設事業本部の担当常務で、大久保はその第一部長だった。しかも大久保の別居している妻が、紅林と一緒にアフリカへ旅行する……。そのこと自体まず常識では考えられないことだったし、一緒にアフリカへ旅行し、同室していたのだから、なにもなかったと説明しても、信じてはもらえない話だった。副社長と相談し、田口に二十万円を払うことになったのはそのためである。

情報屋の田口は、情報の内容を見てからでないと、金は渡せないという入江の言葉に、左の頬をひきつるような不気味な笑いを泛かべた。

「買いたくなければ売らないよ」

投げ返す口調だった。

「買いたくないとは言っていない」

「疑っているのか」

「疑うも疑わないも、お話の証拠を拝見しないことには、なにもわかりません」

「とぼけなくてもいいんだよ」

「え！」

ドスのきいた田口の低い声に、入江は思わず背筋を伸ばした。

「入江さん。あなたが紅林常務の死因調査に、わざわざタンザニアまで行ってきたことは、よく知っているんだ。その結果、業務で出張した紅林常務に、女性の同伴者があったことを、あなたは突きとめてきている。さらにその女性が、大久保澄江であることもわかっているはずじゃないのかな」

「そんなこと、どこで聞かれたんですか」

入江が突きとめてきた紅林の同伴女性は、大久保澄江ではなく、新美伸子……であった。しかし入江はかまわずに聞き返した。

「これだから素人は困るんだ」

「え?……」

「誰もが知っていることで、情報の値打ちがあると思うのかね」

「それは……」

「どこで聞いたことだなんて、情報源を明かすばかはいないさ」

「しかし紅林常務の同伴女性は、本当に大久保澄江さんだったんですか」

「それは君が調べてきたはずだろう」

「ええまあ……」

写真の女性は久保澄江であるのかもしれないが、ホテルの宿泊者台帳にのっていた名前は、新美伸子であった。

「わかったかね」

「やむをえません」

「それではもうおうか」

「その前に、大久保澄江さんが出国した証拠とか、そういうものは書類になっていないんですか」

「書類にはなっていない、渡すのはぼくのメモだけだ」

「そのメモに、田口さんの持っておられる情報が、全部書いてあるんですね」

「もちろん書いてある」

「それでは確認のため、一つだけ聞かしてください」

「見かけによらず、あんたもねばるね」

「大久保澄江さんの住所はどこですか」

「あんたのほうでは、まだ見当がついていないはずだろう」

「いえ、わかっています」

「ほう……。青山あおやまだよ」

「青山?……。そんなはずはないでしょう」

「どうして」

「わたしは二十万円の金を、このまま会社へ持って帰ってもいいんです。欺だまされて、ガセネタを掴つかまされて上司

に叱られるより、取引きを拒否したほうがすっきりします」

大久保と別居していることも知らなかったくらいだから、澄江の住所がわかつているはずがなかった。はったりの当てずっぽうであったが、薄ら笑いを泛かべた田口の口調に、入江はなにかからかわれている感じがして、強く居直ったものである。

「わかった。赤坂のサンコーポ三〇六号室だ。乃木坂^{のぎざか}を上がって、TBSの信号から二つ目を右へ、五十メートルほど入った六階建てのマンション。行ってみればすぐにわかる」

「そうですか」

「今度は信用するかね」

「どうやら間違いないようです。もう一つあります」

「おい。いいかげんにしろよ」

「いえ、これが一番肝腎な問題で、この点について田口さんが確約してくださいらないなら、わたしのほうでは情報料をお払いできません」

「いいだろう。聞こうじゃないか」

「このネタは、今後いっさい忘れていただきたい。もう一度、別な相手に売るとか、そういうことがあったら、こちらにも覚悟があります」

「まさか、刑事が来ているんじゃないだろうな」

入江のその口調に、田口は急に落着きを失い、腰を浮かすようにして、ラウンジやロビーをきょろきょろと見回した。

「警察には言っていないません」

「ほんとうだろうね」

「それは約束します。田口さんも、約束していただきたい」

「おれだって、守るべき信義まで金にしようとは思わんさ」

ラウンジやロビーに刑事らしい影がないことで、ほっとしたようにソファにすわり直した田口は、横目で入江を窺^{うかが}いながら言った。入江は、背広の内ポケットから二十万円の紙幣の詰まった、茶色い角封筒を抜き出し、カメラを構えている夏紀によくわかるように、田口が膝の上で抱えているアタッシュケースの上に置く。茶封筒

の厚さを一度確かめてから、田口はアタッシェケースを開き、紙幣を中へ放りこむと、中から一冊の取材帳を抜き出し、入江に手渡した。

「これ一冊？」

普通のメモ用紙を、すこし縦長に裁断し、天糊をつけただけの、新聞記者や週刊誌記者が無造作にポケットに捻じこんでいる、ありきたりの取材帳であった。

——果たして。

夏紀は田口が角封筒を、アタッシェケースにしまう場面を、うまく写せたかどうか。

「それにみんな書いてある。要するに、あんたのほうとしては、おれが今後この件から、いっさい手を引けばそれでいいわけだろう」

「そういうことです」

「だけどね、紅林常務というのは以前からいろいろあるんだぜ。あの人は女好きだったからね」

金を受け取った安堵感からか、田口はポケットをまさぐり、ショートピースをつまみ出して相変わらずの薄笑いと言った。

「それで今度のことがわかったのですか」

「かまをかけてもだめだよ」

「もういいじゃないですか。田口さんはこの件から今後いっさい手を引かれるんですから、知っていることをみんな教えてくれませんか」

「やめておこう。いろいろと差し障りがあるんでね」

切上げ時と感じたのか、田口は二十万円の紙幣を押しこんだアタッシェケースを持ち直し、ソファーから腰を上げた。

入江も田口と一緒に立つ。

「しかしわたしのタンザニア行きまで、よく知っていましたね」

「紅林さんは泥棒にやられたことになっているそうだけど、そんなことは方に一つも考えられないね」

「え？」

「だってあの人、アフリカの事情には精通しているはずじゃないか、そうだろう」

左の頬をひきつるような笑いを残し、田口は足早に立ち去っていった。

入ったときとは逆に、入江が先にホテルを出て、日生劇場の大きな柱の陰で夏紀を待つことにしてあった。

入江は劇場前の柱の陰で、受け取ったばかりの取材帳を抜き出し、軽く目を通す感じで、ページをくった。

取材帳は三十枚ほどのザラ紙を綴じたもので、メモはその七ページ分しかなく、大きな書きなぐりの字で、はじめに四人の女性の名前が列記してあり、その四人目が久保澄江となっていた。

二ページ以降は、二年前からの紅林の海外出張のスケジュール表。

たとえば、昭和五十二年十月二十日、羽田発―テヘラン。立花保子^{たちばなほこ}同伴。テヘランの宿舎、市内のパークホテル。立花保子は同室……といった調子で、しかし、ただそれだけであった。

二十万円の値打ちのあるメモとは、とうてい思えない。

夏紀がホテルを出てくると、入江は取材帳をしまい、腕の時計を覗きこんだ。

「お昼をごちそうしようか」

「あら。写真はうまく撮れたかって、聞かなくてもいいの」

「うまくいったんだろう」

「ひどい言い方ね」

ポケットカメラをショルダーバッグへしまい、夏紀は不満そうに言った。

「じゃ、だめだったの？」

肩を並べ、陽差しを避けてビルの壁面を選び、有楽町駅へ向かいながら、入江は丸味のある夏紀の鼻筋に一瞥を投げた。

学生時代に、ボートばかり漕いで四年間を過ごしてしまった入江の、一七八センチの筋肉質な長身と比較すると、一六〇センチで、ワンピースのウエストが深くくびれた夏紀は、大人と子どもといった身長差が感じられた。背丈だけではなく、陽灼けがそのまま地色になってしまった入江とは対照的に、色白な夏紀の肌には、若い

二十三歳の女性特有な、滑るような艶があった。

「うまく撮れたわ」

「渡した封筒をしまうところは」

「入江さんが相手の方のアタッシェケースの上に置いたところと、しまうところよ」

「いい度胸だね」

入江は思わず首を振った。

「席を立て、わたしの方へ向いたときも、正面から一枚撮ったわよ」

「それはありがたい。お手柄に感謝する意味で、ちょうど十二時だし、やはりお昼をごちそうさせていただきましよう」

おどけ気味に、入江は夏紀に頭を下げた。

「いいわ。じゃごちそうになる」

「なにがよろしいですかな」

「そうね」

「それでは牛井にしましょう」

「あら」

「いけませんか」

「気をもたせておいて、三百円の牛井でごまかすつもりね」

夏紀は入江を睨むように言った。だがその目は、同じ会社の法規部で、背中合わせの席にすわっているビジネスマンとOLの単なる同僚意識を越えた潤い^{うるおい}をたたえていた。

有楽町のガードを抜け、派手なれんの牛井屋で、二人は腰を揃えてすわった。

昼食時間でもあったから、店はほぼ満席で、夏紀の隣りでどんぶりを抱えこんでいる学生ふうの男が、肉だけ先にきれいにたいらげて、残りのご飯を無造作に口の中へかき込んでいた。

「入江さんは、わたしを太らせたいのね」

それを見て夏紀が吐息まじりに言う。

「うん。いいね」

「あら、太った人のほうが好きなの」

「君の太った姿なら、一度見てみたいと思ってね」

「ひどいわ」

短大を卒業し、ロイヤル物産に入社して二年。